

希有

「希有なこと」というように、「希有」とは稀なこと、滅多にない事という意味です。そこから不思議

なこと、奇異に思う事など、畏れるという意味も含まれる使い方も出てきました。仏教の場合は前者で稀なことという意味で用いられることが多いです。

西光寺ではお盆などで読むことが多い「讃仏偈」には、阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩が師の世自在王仏を讃えている場面であ

戒聞精進 三昧智慧 威徳無侶 殊勝「希有」

（規律を守り、教えを聞き、努力をし、心を静かに保ち、智慧を得たその徳は、比べるものがなく、何よりも優れています）

親鸞聖人の著書『教行信証』には、冒頭に出てきます。

「撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ」

（阿弥陀仏の救いは、一度撰め取ったら決して見捨てな

いという真実の言葉と世を超えた滅多にない正しい教

えであり、それを聞き、よく考え、ためらってはいけません）

と。是非探してください。



他を滅せば
自を滅す

法華經

こんなところに

仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

穢れ

次のような立札を
通夜や葬儀の際に
見たことはないでしょうか。

浄土真宗では
清め塩は使いません

「浄土真宗ではお清めの塩を用いません」

これは、いつからかはわかりませんが、浄土真宗では死を穢れとは見ないので、塩で清める必要もなく、禊をする必要もないのです。

ある時、知人の葬儀にお参りに行った時です。その家は神道でした。神道においては、死は穢れです。どうやって葬儀をするのか興味がありました。祭壇の中央に鏡を置き、その前に棺はありません。棺はどこにもないのです。実は、棺は表ではなく、祭壇の後ろに安置されています。参拝者は、祭壇を周って裏へと回り、棺を拝見するのです。

このように神道と仏教では、死の受け取りに違いがありますので、誰かが亡くなると神棚には白い紙を張ります。

「仏壇の扉は閉めた方がいいですか」

とよく聞かれますが、その必要はありません。死は至極当然のことであって、死を受け入れていくことが仏教の教えですので、仏壇の扉は開いたままで大丈夫なのです。

